

アイルランドにおけるジェイムズ・ジョイス 受容と文学的伝統の変容

結城, 英雄 / YUKI, Hideo

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

科学研究費助成事業 研究成果報告書

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

4

(発行年 / Year)

2018-06-02

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 2 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370335

研究課題名(和文) アイルランドにおけるジェイムズ・ジョイス受容と文学的伝統の変容

研究課題名(英文) The Reception of James Joyce and the Changes of the Literary Tradition in Ireland

研究代表者

結城 英雄 (YUKI, Hideo)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：70210581

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、アイルランドにおけるジェイムズ・ジョイスの受容とそれに関わるアイルランドの文学の変容を考察することを目的とした。ジョイスはモダニズムの大変革者として評価されていたが、アイルランドでは異端者として無視される傾向にあった。その流れを覆したのが1993年のEU加盟であり、アイルランドもヨーロッパの趨勢を無視しえなくなってきた。アイルランドがジョイス化したと思われる。その一方、アイルランドは国家としてのアイデンティティを死守する都合もあった。こうしたバランスによって立ち、ジョイスの受容が進行し、同時にアイルランドの文学観も変貌していった。本研究はその流れを検証した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to investigate the reception of James Joyce and the consequent changes of the literary tradition in Ireland. Joyce had been appraised as a great modernist innovator in Europe, but he had been ignored in Ireland as a heretic writer. However, this trend was reversed after the accession to the EU of Ireland because it could not set aside Joyce's modernist achievements as an EU member. On the other hand, Ireland had to defend its identity as a unique nation. Therefore, Ireland faced a dilemma between opening its stance to the world and keeping its particular literary tradition. In order to investigate this dilemma, this study concentrates its focus on the four periods from 1922 to the present and elucidates the aftermath of the reception of James Joyce and the changes of the literary tradition in Ireland.

研究分野：英語圏文学

キーワード：アイルランド ジェイムズ・ジョイス 文学的伝統 EU モダニズム 都市

1. 研究開始当初の背景

ジェームズ・ジョイスは、生誕百年祭の1982年、アイルランドで自国の作家として承認された。以降、ジョイスはアイルランドの文学的伝統のなかに回収されることになった。ジョイスは大陸のモダニズムの運動に同調した先鋭な作品を創作したため、それまでアイルランド人作家として受け入れられなかったが、そのアイルランドもジョイスの世界的な名声を無視しえなくなっていたのだ。そのため、アイルランドでのジョイス受容の動向を探り、モダニストとしてのジョイス評価、さらにジョイス受容にともなうアイルランドの文学的伝統の変容を具体的に検証する必要があった。

2. 研究の目的

アイルランドにおけるジョイス受容の波紋を論じる研究者は少ない。これまでモダニストとしてのジョイスの位置を測定し、さらにその文学の源泉がアイルランドにあることも論じられてきたが、モダニストとして定立された世界的な作家としてのジョイスが、逆にアイルランドの文学的伝統に及ぼしている視点は欠けていた。アイルランドでのジョイス受容はその文学的伝統とも関わる大きな問題である。本研究はその点を明らかにするものである。

3. 研究の方法

そこで本研究は4年をめどに、アイルランドでのジョイス受容と、それにともなう文学的伝統を考察するものである。そのため4期に絞りながら、その具体的な関わりを順次検証することにした。すなわち、1922年のアイルランド独立からジョイスが亡くなるまでの「潜伏期」、ジョイス没後からジョイス受容が承認される1982年までの「変遷期」、ジョイス受容の承認から北アイルランドとの和平協定が締結される2007年にいたる「開花期」、2007年の和平協定締結から今日にいたる「転換期」の4期である。時代の参照枠としては社会学的なアプローチを試みるが、同時にそれぞれの時代の主要な作家や作品との照合も試みる。

4. 研究成果

(1)平成26年度は、アイルランドの独立、ならびに『ユリシーズ』が出版された1922年から、ジョイスが亡くなった1941年までの「潜伏期」を中心に、アイルランドにおけるジョイス受容を検証した。この時代、ジョイスの『ユリシーズ』が発禁処分になっていたこともあり、アイルランドでジョイスは忌避されるべき作家となっていた。またプロテスタントの作家も疎外されていた。そのような状況にありながらも、アイルランドでもジョイスを賛美する作家もいた。そこでアイルランドにおけるジョイスに対する批判的な意見を検討すると同時に、ジョイスの文学を

賛美する人々の意見を対比するところから出発した。とくにシェイン・レズリーとエリザベス・ポーエンが対照的であった。その一方、国外におけるジョイス評価は目覚ましかった。そのためアイルランドでの評価と対照させながら、フランス、アメリカ、イギリスなどの状況を取りあげた。フランスは『ユリシーズ』を出版した国であるのみならず、モダニズム運動の拠点でもあり、多くの作家がジョイスを一様に崇拝していた。またアメリカにおいても、ジョイスに関心を持つ作家も多く、1933年の猥褻裁判で勝利をもたらすことになり、ジョイス研究が急速に推進された。それと対照的なのがイギリスであり、ジョイスに対する嫌悪を示していた。これはイギリスが守ろうとしていた文学的伝統にジョイスが適合しないことに加え、ジョイスがアイルランド人であるという出自にも関係することであった。

(2)平成27年度は、アイルランドの文学的伝統に及ぼしたジェームズ・ジョイスの影響をめぐり、ジョイス没後の1941年から、生誕百年祭の1982年にジョイスがアイルランド人作家として承認されるにいたる「変遷期」を対象とし、その動向を詳細に分析した。そしてそのアイルランドの変貌の動力となったのが、世界でのジョイス研究、ならびに1973年のアイルランドのEC加盟であった。本年度はその詳細をたどった。世界での動向としては、フランスでのジョイスへの関心が高まり、また彼の文学に心酔した文学者が多かったことを挙げたい。実は、このフランスの事情を推進したのがアメリカ人であった。その先鋒として、エドモンド・ウィルソンやハリー・レヴィン、さらにヒュー・ケナーやリチャード・エルマンなどによる確固とした研究が推進された。同時代にはウラジミール・ナボコフのような作家もジョイスを文学講義で扱い、ジョイス熱をあおることになった。さらにアメリカでは文学理論に新思想を取り込み、構造主義的なアプローチなど、斬新なジョイス論を呈示した。そしてアメリカは世界の先導役として、ジョイスの研究誌を刊行し、さらには国際学会も開催することになった。こうした世界のジョイス研究は、アイルランド出身の作家という狭い枠を広げ、その作品の背景にあるモダニズムへの傾倒、とりわけトリエステ、チューリヒ、パリというジョイスの移り住んだ大陸の都市と創作との関わりも論じるようになった。本年度においては、そうした都市とジョイスとの関連と同時に、アイルランド人作家たちの動向、とりわけエリザベス・ポーエンやフラン・オプライエンとの関わりを検証できた。

(3)平成28年度は、アイルランドにおけるジェームズ・ジョイス受容と文学的伝統をめぐり、1982年から2007年にいたる期間を中心に考察した。これは1982年のジョイス

生誕百年祭から、1993年のアイルランドのEU加盟、さらに南北の間の和平協定が締結された2007年までの期間で、政治的にも変革期にあたる。そしてジョイスを自国の文学者として定立する諸々の試みが進行した、アイルランドのジョイス受容のまさしく「開花期」に相当する。そこで最初にこの間のアイルランドにおけるジョイスに対する方位を検討した。ジョイス生誕百年祭の1982年、アイルランドはジョイスを自国の文学者として承認した。その後、1992年には、ジョイス死後50年が経過し、著作権が切れた都合もあり、アイルランド人の学者の手により、注釈を付した安価なペンギン版で、ジョイスの作品集が刊行された。また1994年にはダブリン市内にジェイムズ・ジョイス・センターが開設され、ジョイスをアイルランド人作家として観光の目玉にした。そしてアイルランドは1993年にEUに加盟したこともあり、国際的な作家としてのジョイスを称揚し、その一方の開かれた国家としての自信溢れるアイルランドという相関関係が構築された。そのため、アメリカやヨーロッパ大陸の国々のジョイス研究の隆盛に対抗し、ジョイスを自国の作家として奪還しようとする、アイルランドにおける研究の起こりを跡付けることができた。こうしたアイルランドのジョイス受容は、アイルランドの政治力学とも連結している。対外的にはEUの一員としての国際的な相貌をかこちながら、同時にアイルランド国内の自らのアイデンティティの構築を試みていたのだ。そもそもアイルランドは南北問題を抱え、自国の作家としてのジョイス論も政治的な意味を帯びざるをえなかったのだ。時代的にもポストコロニアリズムの文学観が隆盛しており、政治とは無縁なジョイス像も切り崩されつつあった。アイルランドにおけるジョイスをめぐる国際性と民族性のジレンマは、この時期の矛盾を露呈している。

(4)平成29年度は、アイルランドにおけるジェイムズ・ジョイス受容をめぐる、その「転換期」にあたる2007年以降の状況を検討した。この時代のアイルランドは、「ケルティック・タイガー」と呼ばれた経済的繁栄も終息し、国家のアイデンティティを再確認すべき時代を迎え、ジョイス受容のまさしく転換期に相当する。先行するジョイス受容の「開花期」は、1993年のEU加盟以降の15年余りで、ジョイス評価はヨーロッパとアイルランドとの間で微妙なバランスを保っていた。アイルランドもEU加盟国として、国際的な視野によって立ち、ジョイスを受け入れた。ジョイスがトリエステ、チューリヒ、パリといった大陸の都市を移り住みながら、その地の思想を敏感に吸収したように、アイルランドもヨーロッパに、さらには世界に開かれた国家としての相貌をてらった。その一方で、アイルランド独自のアイデンティティ

を前景化するため、ゲール語を母語とし、アイルランド独自の文化にジョイスを取り込んでいった。こうしたバランスが崩れたのが「転換期」である。ヨーロッパを中心とするジョイス受容の基盤が脆弱であることも判明した。モダニズムの大変革者としてのジョイス像は、ヨーロッパのアメリカ人によって構想され、欧米で確立していった。このジョイス像と矛盾するのが、ダブリンという地域都市に固執しながら創作を試みた、ジョイスの主要4作、すなわち『ダブリンの市民』、『若い芸術家の肖像』、『ユリシーズ』、および『フィネガンズ・ウェイク』の解釈である。この時期のアイルランドにおいては、市民権が認知され易いこともあり、多くの移民を抱え、人種差別的な方策で対応することになった。この姿勢はジョイスが描いた閉塞的で狭隘なアイルランドそのものであった。かくしてアイルランドは、ジョイスの描いたかつての世界へ回帰することで、ヨーロッパ化したジョイス像を見失った。今や、自国の文化遺産の一部としてジョイスを取り込みつつも、そのヨーロッパ的な側面から離れつつある。

(5)以上のようにアイルランドにおけるジョイス受容を4期に分け、具体的にかつ詳細に検証したが、その流れの底にあるのはモダニストとしてのジョイス評価である。その背景にあるのがリチャード・エルマンの『ジェイムズ・ジョイス伝』(1959/1982)であるだろう。出版されてすでに60年近くになるが、ジョイス伝の定本として、その後のジョイス伝を封印している。その一方、批評の動向も変貌し、シニフィアンとしてのジョイスに対応するシニフィエとしてのジョイス像は様々である。アイルランドのジョイス研究のみならず、世界のジョイス研究も新たなジョイス像を検討すべきときにある。モダニストを宣言しながらアイルランドに固執し、アイルランドを舞台にしながら『ユリシーズ』や『フィネガンズ・ウェイク』では外国人を主人公にしている。きわめて単純な疑問でありながら、アイルランドの文学研究はそれに対する回答を用意していないと思われる。これは今後の課題であるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 8 件)

結城 英雄 「アイルランドの文学的伝統とジェイムズ・ジョイス(7)」、『法政大学文学部紀要』76号、査読無、67-78、2018

結城 英雄 「アイルランドの文学的伝統とジェイムズ・ジョイス(6)」、『法政大学文学部紀要』75号、査読無、61-71、2017

結城 英雄「アイルランドの文学的伝統とジェームズ・ジョイス(5)」、『法政大学文学部紀要』74号、査読無、35-45、2017

結城 英雄「アイルランドの文学的伝統とジェームズ・ジョイス(4)」、『法政大学文学部紀要』73号、査読無、27-37、2016

結城 英雄「アイルランドの文学的伝統とジェームズ・ジョイス(3)」、『法政大学文学部紀要』72号、査読無、77-88、2016

結城 英雄「アイルランドの文学的伝統とジェームズ・ジョイス(2)」、『法政大学文学部紀要』71号、査読無、47-56、2015

結城 英雄「『ユリシーズ』を読む 百のQ & A 15」、『すばる』、7月号、査読無、254-269、2015

結城 英雄「アイルランドの文学的伝統とジェームズ・ジョイス(1)」、『法政大学文学部紀要』70号、査読無、59-70、2015

〔学会発表〕(計 1 件)

結城 英雄、日本ジェームズ・ジョイス協会、「『ユリシーズ』と復活祭蜂起」、2017

〔図書〕(計 6 件)

結城 英雄他、金聖堂、『二十一世紀の文学』、2017、272 (175-194)

結城 英雄他、春風社、『文学都市ダブリン』、2017、436 (229-249)

結城 英雄他、水声社、『アイリッシュ・アメリカンの文化を読む』、2016、236 (11-29, 173-192)

結城 英雄他、金星堂、『チャーサーと英米文学』、2015、416

結城 英雄他、松柏社、『一九世紀「英国」小説の展開』、2014、457 (365-384)

結城 英雄他、開文社出版、『アイルランド文学 その伝統と遺産』、2014、698 (321-340)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

結城 英雄 (YUKI, Hideo)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：70210581